

茨高
茨中

春秋

発行
茨高・茨中 P T A
代表 嶋志田 剛
編集
茨高・茨中文化広報委員会
水戸市八幡町16-1
電話 029(221)4936
茨高・茨中公式ホームページ
<http://www.ibaraki-jsh.ed.jp>
印刷 いばらき印刷(株)



「易と不易」
変わるものと変わらないもの
PTA会長 嶋志田 剛

PTA会員の皆様におかれましては、平素より茨城中学・高等学校 P T A 活動にご理解とご協力を賜りまして、誠にありがとうございます。

さて、近年はスマートフォン
の普及が目覚ましく、今日では小学生から高齢者まで、誰もが手にしている時代となりました。スマートフォンは、情報収集やコミュニケーション、学習、娯楽など、あらゆる面で私たちの生活を支えています。子どもたちも、探究学習やオンライン授業、友達とのやりとりなど、日常的にスマートフォンを活用しています。まさに、情報社会の恩恵を受けて育っている世代です。生活は大きく変化し、利便さと同時に新たな課題も生まれています。

このような時代のなかで、私は保護者の一人として、日々子どもたちの成長を見守りながら、ふと「易と不易」という言葉の意味を考えることがあります。「易」とは変化するもの、「不易」とは変わらないもの。これは松尾芭蕉が俳諧の理念として説いたと言われている言葉ですが、学校教育や家庭教育にも深く通じるものがあると感じています。

時代は、常に変化しています。教育現場ではICTの導入が進み、子どもたちはタブレットを使って学び、AIを活用した学習支援も始まっています。P T A 活動も例外ではなく、今までにない新しい形が求められるようになってきました。これらはまさに「易」、つまり変化するもので

す。しかし、どれほど時代が変わっても、子どもたちを思う気持ち、学校と家庭が手を合わせて子どもたちの未来を支えるという姿勢は、決して変わることはない。「不易」ではないでしょうか。P T A 活動の本質もまた「不易」にあると思います。P T A 活動の形態は変わっても、子どもたちの笑顔を守り、安心して学べる環境を整えるという目的は変わりません。「易と不易」は、変化を恐れず、本質を見失わないための指針です。新しいことに挑戦しながらも、変えてはならないものを守る。そのバランスこそが、今の P T A 活動に求められているのではないのでしょうか。

これからも、P T A 会員の皆様と共に「易」に対して柔軟に対応しつつ、「不易」を大切にす P T A 活動を進めていきたいと考えております。

さて、生徒の皆さん、「夢」や「希望」は、いくつありますか？中学生・高校生という時期は、人生の中でも特に感受性や創造力が豊かで、可能性に満ちています。心も体も大きく成長し、社会との関わりが広がる中で、自分の将来について考え始める大切な時期でもあります。生徒の皆さんにとって「夢」と「希望」の進むべき道を照らす灯台のような存在です。

「夢」とは、自分が将来こうなりたい、こういうことをしてみたいという理想の姿です。そして「希望」とは、その夢に向かって歩む力、信じる心です。夢があるから努力でき、希望がある

から困難にも立ち向かえる。夢と希望は、生徒の皆さんの成長を支える大切な原動力です。しかし、夢や希望を抱くことが大事だからといって、現実を忘れてはいけません。現実を正しく把握できなければ、夢や希望は決して実現しません。生徒の皆さんは、現実をよく見極めて、現実よりも一段高い目標を決めて日々の生活を着実に送ることを心がけてください。最



演繹法と帰納法
校長 梶 克治

十月七日、大阪大学特任教授・坂口志文さんのノーベル生理学・医学賞受賞が発表になりました。日本人の自然科学分野でのノーベル賞は、二〇二一年の眞鍋淑郎さん以来四年ぶりとなりました。翌八日には、京都大学特別教授・北川進さんも化学賞を受賞し、日本中が喜びに沸きました。

坂口さんの受賞は、病原体を攻撃する免疫細胞の中に免疫反応の暴走を制御するブレーキの働きをする「制御性T細胞」を発見した業績が認められたものです。坂口さんが免疫を制御する細胞の存在を確認したのは、米国留学中の一九八五年のことだといえます。しかしこの頃、免疫学の世界では、別の研究者が提唱していた免疫抑制細胞の存在が米国の研究者によって全否定されるという大事件が起こりました。坂口さんの研究にも冷やかな目が向けられました。

しかし、九十五年、坂口さんは最新の解析技術を駆使して「制御性T細胞」が免疫の異常な反応に対するブレーキ役の正体であることを突き止めるのです。

論理学において、正しさを証明するための思考法は大きく二種類に分けられます。それが、演繹法と帰納法です。演繹法とは、ある一般的な命題を正しさと仮定したとき、そこから個別の結果を導くことができるという考え方です。例えば「鳥はすべて卵から生まれる」という命題を正とすると、「ペンギンは鳥である」「カラスは鳥である」という事実を経て、「ペンギンは卵から生まれる」「カラスは卵から生まれる」という結論にいたります。演繹法では前提となる命題が正しければ、例外なく正しい結論を導くことが可能です。

帰納法は、それとは逆に、個別の事実の積み重ねの中から一般的な法則性を導き出します。「スズメは空を飛ぶ」「カラスは空を飛ぶ」「ツバメは空を飛ぶ」という個々の事実から「鳥は空を飛ぶ」という一般則を導くのが帰納法です。しかし、帰納法で得られた答えは一〇〇％正しいとは限りません。「ペンギンは空を飛ばない」という事実が明らかになった時点で、「鳥は空を

初の目標が達成できたならば、次の目標を決めて達成できるまで努力する。そうすれば、夢が徐々に現実化していくのだと思います。

最後となりますが、子どもたちが安心して夢を語り、希望が持てるような環境づくりに取り組んでいきたいと考えております。今後とも、皆様からのご理解とご協力を賜りますよう、重ねてお願い申し上げます。

飛ぶ」という一般則は誤りとなります。さて、それではここで問題です。人類が歩んできた知の歴史の中で、新たな発見や知識をもたらしてきたのは、演繹法でしょうか？それとも帰納法でしょうか？その答えは、帰納法だと言われています。閉じた論理の中で常に正しい答えを導く演繹法は、新しい知識を創造することは苦手です。一方で、帰納法は外に向かって開かれた思考法です。新たな事実が出現すれば、その事実をふまえて結果を更新することができます。学問や科学の歴史において、誤った仮説など星の数ほど存在しています。誤りを怖れて現状維持にとどまっていたのでは、新たな知の扉を開くことはできません。既存の事実にもとづき仮説を立てる、新たな事実が発見されたら、前の仮説の誤りを改めて、また新たな仮説を生み出していく。こうした繰り返しが、ブレイクスルーを生み、学問や科学の進歩を支えてきたのです。

「信念の人」。研究者仲間が坂口さんをそう評しているといえます。坂口さんは、否定されても否定されても信念を貫き、数え切れない実験を繰り返して、新たな事実を積み重ねて未知の分野を切り拓きました。その研究姿勢は、まさに帰納法的といえるのではないのでしょうか。

「そんなのあたりまえ」「〇〇は正しいにきまつている」といった姿勢からは、新しい何かは生まれません。世界は、正解のない問いにあふれています。答え止に陥ることなく果敢に挑戦し続けること。そして、学ぶことへの豊かな喜びを推進力に自己更新を繰り返すこと。まもなく訪れる二〇二六年、そんな希望を生徒諸君に託します。

高校クラスマッチ 2025前期 9月12日

総合順位

- <3年生> 1位F組 2位E組 3位D組
- <2年生> 1位E組 2位D組 3位A組
- <1年生> 1位F組 2位D組 3位C組

高三F 川和 瑠平

クラスマッチで優勝できて本当にうれしかったです。練習のときからクラス全員が声を掛け合い、団結して頑張ってきた成果が形になったと思います。試合中は苦しい場面もありましたが、仲間を信じて最後まであきらめずに戦えました。この経験を通して、努力することや仲間と協力することの大切さを改めて感じました。クラスの絆がさらに深まった最高の思い出になりました。



今回が、このクラスマッチで初めてのことです。チームで当日の直前まで作戦を練り、本気で勝負しようという意気込みで本番に臨むことができました。本番でも互いに励まし合いました。最後まで諦めずに戦いました。僕は「コミュニケーション」が僕達を優勝へ導いたと思います。今回培った力立ちこる困難に活かし、今後につなげていきます！

高二E 大平 康介



高一クラスマッチ優勝
高一F 龍福 優樹

クラスマッチで優勝することができ、とても嬉しいです！各種目でクラスの仲間が全力を尽くし、応援の声も絶えない楽しい一日になりました。それぞれの競技で互いに励まし合い、クラス全体が一つになれたと思います。思い出に残る最高の時間でした。



総合順位

- < 3 年生 >
 1 位 B 組 2 位 D 組
 3 位 C 組 4 位 A 組

- < 2 年生 >
 1 位 C 組 2 位 B 組
 3 位 A 組 4 位 D 組

- < 1 年生 >
 1 位 B 組 2 位 D 組
 2 位 C 組 3 位 A 組



中三クラスマッチ優勝

中三B 中山 佳樹

今回のクラスマッチも多くの生徒が自らのクラスの勝利のために奮って競技を行うことができて大変良かったと思います。また、今回も天候に恵まれ、前期クラスマッチを行うことができて、大きな事故や怪我等もなく安全に競技を行うことができた点も大変良かったです。後期もまた素晴らしいクラスマッチを行うことができますことを心から楽しみにしています。

中二クラスマッチ優勝

中二C 中山 咲季

前期クラスマッチでは、全員リレーはもちろん、その他の競技も全クラスの声援が飛び交う白熱した戦いになりました。また、皆が普段出さない真剣な表情で夢中になって競技に参加しており、普段とは一味違った一面を垣間見ることができました。一生記憶に残る一日だったと思います。そして最後に、中二Cの仲間と一致団結して優勝することができました。クラスメイトの皆さん、本当にありがとう。

中一クラスマッチ優勝

中一B 五十嵐 遙

割れんばかりの歓声の中、優勝を実感しました。バドミの粘り強いプレー、ドッジの瞬発力、卓球の鋭い反射神経、サッカーのチーム連携が光りました。狩り人競争やU・N・O、イントロ、全員リレーでも、それぞれの競技の魅力を存分に発揮し、仲間と力を合わせ全力で尽くせたことが印象的です。みんなで掴んだこの優勝は、かけがえない思い出となり、絆を深めるものとなりました。



2025前期 中学クラスマッチ

9月12日





高二研修旅行



高二E 大森 柚乃

カナダの研修旅行では、現地の学生との交流で異文化を学び、ホストファミリーとの時間を通してカナダの日常を体験できました。特に、ホストシスターやその友達とのショッピングは忘れられない思い出です。これらの経験を通して、視野が広がり、国際的な感覚を養うことができました。

高二C 工藤 由暉

カナダコースは全日ホームステイだったので、他コースと比べ英語と触れ合う機会が多かったと思います。中でも、現地の高校生との交流がとても印象に残りました。カナダは多民族国家であり高校には様々な国籍、人種の人がいきました。現地の生徒と英語で交流を深めるうちに、言葉の力と大切さを実感しました。

カナダ 教員 福田 賢二

はじめに、九十六名の生徒が怪我や病気もせず元気に過ごせたことに感謝したいと思います。生徒たちは何事にも積極的に行動してくれました。高校生や大学生との交流、ホストファミリーとの生活、異国での買い物。私たち教員の期待をはるかに超える素晴らしい姿の茨高生を見ることができ、生徒たちを誇りに思えた研修旅行になりました。



高二E 清水 瑛仁

多岐にわたる活動でシンガポールの魅力を五感で体験した。マリナーベイ・サンズやガーデンズ・バイ・ザ・ベイの壮大さ、緑と技術の融合に圧倒された。B&Sプログラムでは現地の学生と交流。この貴重な経験を今後の学校生活、そして将来に繋げていきたい。



高二C 宮口 有虹

シンガポール研修では、ホームステイを通して現地の生活や文化に触れ、多様性を大切にする気持ちを学びました。アラブストリートやチャイナタウンではいろいろな文化が共にある様子に驚き、現地の学生との交流で英語を使って話し、自信と新しい考えを得ることができました。この経験をこれから活かしていきたいです。

シンガポール 教員 遠藤 純

シンガポールでは晴天に恵まれ、体調不良者もなく、四十五名全員がすべての日程に参加することができました。世界の中でも随一の発展を見せ、様々な民族が共存する多民族国家であるシンガポールでの経験を通して、生徒たちは横断的な視野を獲得できたようでした。

高二F 豊崎 汐莉

私は台北の街を巡り、これまでにない体験をしました。故宮博物院の見学や天燈上げ、九份の街歩き、台湾グルメや現地の学生との交流など、見るもの全てが真新しく、驚きと喜びを感じました。いつの間にか出発前の不安は消え、街の活気や人々の力強さに触れ、探究心が湧きました。本当に貴重な経験ができてよかったです。

高二D 青木 健

台湾の旅行前までは、「安くて美味しい」という曖昧な考えしかなかったです。しかし、日本ではお菓子や飲み物に使用されているシナモンが、魯肉飯や牛肉麵などのあらゆる食べ物に含まれていることが衝撃でした。台湾ならではの食文化の奥深さや多様さから、食を通して文化の豊かさを学ぶことができました。

台湾 教員 吉田 尚史

台湾では、辿ってきた歴史や培ってきた文化の深さに触れ、現地の方々との交流を通して言葉は違っても笑顔で通じ合える体験ができました。市街に溢れている看板は漢字ばかりでしたが、何となく意味が分かる喜びもあり、夜市の活気や九份の美しい街並みなど、すべてが新鮮で、私たちの視野を広げる貴重な経験になりました。



高二G 滝澤 奈央

私はこの留学で多くの貴重な経験をし、その中で自己成長を強く感じました。未知の土地で過ごす壁、言いたいことを正確に伝えられない壁、グループに馴染めない壁…。最初、グループの話についていけず、孤立感や悔しさを感じることも多々ありました。しかし、そこで諦めず、話を聞くだけでもその場に居続けることを決めました。少しずつ自分も話せるようになり、グループに馴染めるようになりました。留学中、何度も困難に直面し、留学が簡単ではないことを実感しました。何度も涙を流しました。しかし、ただ泣いているだけでは前に進めないと感じ、解決策を考え、できることから実行していきました。これを繰り返すことで、再び壁にぶつかっても容易に乗り越えられるようになり、留学後半は前半よりも充実した生活を送ることができました。このような経験は私だけでなく、クラスの誰もが感じ、乗り越えてきたことだと思います。そして私たちはそれぞれが強くなり、成長して日本に帰国しました。家族や先生方のサポートに感謝し、留学で培った経験をこれからの学校生活に活かしていきたいです。



国際教養コース ニューゼーランドへの留学を終えて

中三研修旅行

十月十五、十八日

中三学年主任 及川 純

十月十五日～十八日の日程で研修旅行を実施しました。生徒たちは古都の歴史と文化に直接触れる貴重な体験をしました。寺社仏閣の静けさや街並みの美しさに触れ、日本の伝統の深さを感じ取っていました。また、クラス別・班別行動を通して自主性や協調性を養う姿も見られました。何もかもが新鮮で、一気に世界が広がった、学びと成長に満ちた三泊四日となりました。



実行委員長

中三D 茅根 叶歩

十月十五日からの四日間、京都・奈良方面へ行ってきました。京都・奈良にはたくさんの文化財があり、普段の学校生活では体験することのできない貴重な経験となりました。また、茨城中学校の生徒として公共の場での振る舞い等も学ぶことができ、人としての社会性も身につけられました。

私はこの四日間を宝物のように思っています。今回で得た学びを無駄にせず、残り少ない中学校生活に活かし、そして高校生活へと繋げていきたいです。



中三A 谷 颯人

僕は、三泊四日の研修旅行で奈良・京都を訪れ、普段の授業だけでは得られない多くの学びを得ました。なかでも三日目のタクシー研修では、班ごとに予算や時間を考慮し一日の計画を立てて行動し、計画性や協調性の大切さを学びました。他にも、奈良や京都ならではの昔ながらの伝統的な町並みや、歴史的な寺社仏閣を巡ることで、日本の文化の豊かさを改めて実感しました。これらの学びを今後の生活でも活かしていきたいです。

中三B 会沢 愛琉

今回の研修旅行で、楽しいこと、おもしろいことなどはもちろんたくさんありました。ですが、想像以上に学ぶこともたくさんありました。先生だけでなく、ガイドさんやタクシー班研修の運転手さん等のたくさんの人達が僕達を楽しませてくれました。今振り返ってみると、全体的に忙しく、短い時間のように感じますが、とても内容の濃い四日間でした。とても楽しかったです。ありがとうございます！！



中三C 茅根 実愛

私は初めて奈良と京都を訪れました。教科書でしか見たことのなかった東大寺の大仏や清水寺の舞台、能や狂言を実際に見て、その迫力に感動しました。最初は慣れない環境に不安もありましたが、友達や先生と話したり笑い合ったりするうちに楽しい時間に変わっていききました。歴史を学ぶだけでなく、友情の大切さを改めて感じ、一生の思い出になりました。準備してくださった先生方、保護者の皆様本当にありがとうございました。



中三D 永井 美教

修学旅行では、いままで経験できなかった食べ物、文化に触れることができ、とても貴重な体験でした。友達と一緒に観光地を巡ったり、先生に怒られたりする中で、普段以上に親睦を深められました。また、班行動の時間管理では、自分たちで考えて五分前行動する大切さを学びました。今回の研修旅行を通して、協力することの大切さを学び、心に残る修学旅行となりました。



JRC研修活動

JRC部顧問 井上 奈穂

「心をつなぐ国際交流事業」令和七年七月二十日から二十五日、日本赤十字社北関東三県支部による国際交流事業として、各県の代表生徒とマレーシアを訪問しました。本校からは、JRC部所属の山田隆太郎さんと星野世那さんが選考を経て参加しました。

マレーシア赤新月社、国際赤十字・赤新月社連盟、医療施設、および加盟校二校を訪問しました。医療施設では、ボランティアとして活動する医師から現場の貴重なお話を伺うことができました。現地校との交流では、日本文化の紹介や歌・ダンスの披露を行い、マレー舞踊や伝統的な遊びを通して互いの文化への理解を深めました。心に残ったのは、マレーシア赤新月社の事務総長が生徒たちへ向けた「将来のリーダーではなく、今日からリーダーです」というメッセージです。異文化交流を通して言葉の壁を超えた人と人とのつながりの大切さを実感し、国際理解と友好を深める貴重な経験となりました。

高二A 山田 隆太郎

私はこの夏、日本赤十字社主催の国際交流マレーシア派遣事業に参加し、リーダーを

務めました。現地では、IFRC（国際赤十字・赤新月社連盟）や現地校二校、日新月社関連施設を視察訪問しました。活動内容の説明を受けた

り、現地学生との異文化交流や日本文化・学校・JRC活動についての発表、アクティビティを行いました。多民族国家であるマレーシアでは、宗教や言語の違いを超えて互いを尊重し、協働する姿が印象的で、現地の方々は非常に温厚でした。本事業を通して、学生のうちに異文化理解や国際感覚を養い、同じ志の仲間と活動ができる機会は貴重であったと思います。今回の経験で得た、多様な価値観と柔軟な考え方や、広い視野を、今後の学校生活や将来の進路に活かしていきたいと思えます。



サイエンス研修

教員 檜山 俊彦

七月二十一日から二十六日の日程で、サイエンス研修「知床自然探究活動」を実施しました。高校生十八名が知床の雄大な自然を舞台に、海や森をフィールドに多彩な学びを体験しました。原生林トレッキングでは二次林と原生林の違いや植生の変化を自らの目で確かめ、羅臼沖ではマッコウクジラのブローや潜水を間近に観察し、夜間には希少種のシマフクロウも確認しました。また、知床の環境保全の歴史や伐採問題を学び、自然保護の重要性を肌で感じました。頭骨標本を用いた動物形態学やクマ撃退スプレ어의実習を通して野生動物との共存を考察し、最終日には「人とヒグマは共存できるのか」をテーマにディスカッションを行いました。こうした体験を通して、生徒たちは知床の豊かな生態系の尊さを理解し、自然環境への関心を深め、学びの意欲をさらに高めることができました。

高二B 中島 京花

世界遺産・知床でのサイエンス研修では、羅臼沖でのマッコウクジラの観察やサク

ラムスの遡上、野生動物の観察など、学校では学べない自然に触れ、肌で感じることで興味関心の幅が大きく広がりました。また、自分の進路を考える上でも非常に貴重な経験となりました。さらに、知床在住のネイチャーガイドから環境問題や生態系保全について詳しく学び、人間にとつて時に危険となる野生動物との共存の方法や、動物への畏敬の念についても深く心に刻まれました。この貴重な体験を糧に、今後さらに自らの学びの姿勢を高めていきたいと思えます。



Co-Label講座

教員 遠藤 純

「Co-Label」は、昨年度まで実施していたテーマ別課外の理念を踏襲し、日々の授業で培った知識を前提に、現代社会から要請される課題解決能力を育むことを目標として、今年度より新たに開講されました。講座を「地域協創領域」と「学問探究領域」に分類し、年間を通して実施しています。

講座の多くは、地元企業様や各大学に御協力いただいて開講しています。講座に参加した生徒にとって、学習のモチベーションアップはもちろん、将来の進路選択についても深く考えるきっかけになっているようです。今後も「Co-Label」では、生徒が地域社会・国際社会に貢献できるような優れた人間へと成長できるように、機会を提供していきたいと思えます。



参考書バンク

高三C 藤田 渚央

「参考書バンク」は、水戸市との協働により推進している参考書リユース事業です。学生ならではの発想から始まった本活動は、ごみの削減や新たな教育機会の提供を通してSDGsへの貢献を目指しています。設立当初は知名度もなく、計画立案から実行まで全て学生主体で行わなければならませんでした。しかし地道な広報活動や水戸市役所、市民会館をはじめとした多くの方々のご協力のおかげで、四〇〇冊を超える参考書を回収することができました。さらに今夏には大規模譲渡会やSDGsセミナーを開催しました。現在も水戸市役所や水戸市民会館、学校で回収を行っております。これからも私たちの活動と成長を温かく見守っていただければ幸いです。



カルチャーブリッジプログラム

教員 青木 健一郎

今年も Culture Bridge Program の季節が巡ってきた。

今年度は東京大学大学院から四人の講師と、十七人の生徒（それも中一から高三まで！）が参加した。国籍も年齢も異なるそれぞれが、英語という「lingua franca」のみを頼りに集い汗を流した。

カーポベルデご出身の Zaza 先生による圧巻のフアシリテートで初日の緊張は即座に吹き飛んだ。知的興奮の中にある学びの喜び。ことばを捉えた時のあの感覚。この三日間の経験は、参加者一人ひとりに刻印されたに違いない。

高 二 F 皆川 夏希

私は今回のプログラムで「考えを伝えたい」という気持ちの大切さを学びました。プレゼン、会話、意見交換など様々な場面で、たとえ考えを伝えるための単語や表現を知らなかったとしても、「伝えたい」という思いを精一杯表すことで相手も理解しようとしてくれるのだと感じました。これは、普段日本語で会話をしている時には気が付かない、英語で活動したからこそ体感だと思おうので、これから大切にしていきたいです。

中 三 D 田畑 未来

英語漬けの三日間は本当に大変でしたが、それ以上に学



びが多く充実した時間でした。うまく言葉が出ず悔しい場面もありましたが、講師の方々や先輩方のおかげで最後までやり遂げた達成感は忘れられません。英語でコミュニケーションをとり、異なる文化や考え方に触れ心が通じ合う喜びを実感しました。そして英語がもっと好きになり、自信が付きました。この経験を糧に、将来は英語を活かして世界で活躍できるように努力したいと思います。

大学見学

進路指導部主任 秋田 拓郎

七月下旬、高校生八十名が「東北大学オープンキャンパス見学会」に参加しました。

日中は最先端の研究施設の見学、学生の研究内容の見聞、石山教授（本校OB）・坂井教授による特別講義も受講し、研究の奥深さと学問の魅力に触れる貴重な時間となりました。

夜は、東北大学・大学院で学ぶ卒業生を招いた懇親会を実施し、大学生活や受験体験談を直接聞くことができました。事後のアンケートから「将来像がより明確になり勉強のモチベーションが上がった」「様子が伺え、進路選択への意識を大きく高める有意義な二日間となりました。」



高 一 A 高山 慎司

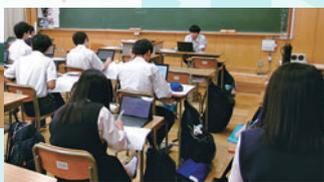
茨城高校を出発し、東北大学に無事到着。その後、石山先生による講義や、各々のオープンキャンパスの見学がありました。自分は川内キャンパスと青葉山キャンパスに行きましたが、広大な敷地や最新の設備などを見て、とても圧倒されました。また、学生スタッフさんたちの研究内容をj見学して、より興味がわきました。特に印象に残ったのが、卒業生との立食会で、大学受験のことや、大学生活といった多くの役立つ話を頂きました。今回のオープンキャンパスで得た多くの経験を基に、二年後の受験に向けて頑張っていきたいです！



探究学習

教員 鈴木 裕太

探究では、教科の垣根を越えた生徒自身が持つ疑問を掘り下げる学習を行います。高校一年生では、各々の興味・関心や進路、社会的・学術的な課題を踏まえたテーマを設定し、研究を進めています。また、本校の教職員だけではなく、メンターを迎え、より様々な視点から考察を深めています。九月二十日、二十七日、二十九日には前期の集大成として中間発表を行いました。発表の仕方に工夫があり、内容も独創的で素晴らしいものでした。今後このような活動を通して、答えがない問いに立ち向かう姿勢を身に付けましょう！



味覚を使って新たな食べ物を生み出せるのか？

校外研修会

PTA役員 緑川 むつみ

去る十月三日、PTA企画として校外研修会を実施いたしました。今回は元教師であり、現在は教育評論家として活躍される親野智可等先生を迎え、「親力」で決まる子供の将来」をテーマにご講演いただきました。思春期真っ只中の子供に、親としてどう向き合

い声かけすべきかなど、笑いを交えつつも心に刺さる講話を拝聴できました。会場的好文(ご)は全面ガラス張り、千波湖や緑を愛でつつ、貸切での昼食となりました。関係者各位並びにご参加くださった皆様にご心より感謝申し上げます。今後ともPTA活動へのご協力をよろしくお願いたします。



中二 林間学校

教員 磯部 奨斗

実行委員長

中二B 菱沼 瑠花

七月二十八日から三十日まで
の二泊三日、福島県猪苗代方面
で林間学校を行いました。天候
に恵まれ、全日程を順調に終え
ることができました。初日の五
色沼トレッキングでは、神秘的
な景観に心を打たれました。二
日目の登山は真夏の厳しい暑さ
の中で行われ、体力面に不安を
抱える生徒もいましたが、互い
に励まし合い、全員が無事に下
山しました。その経験を通じて、
生徒たちの成長と仲間との絆を
強く感じました。最終日には多
彩なアクティビティに主体的に
取り組み、充実感あふれる表情
を見せていました。自然に親し
み、協力し合うことで得られた
学びは、今後の学校生活に活か
されることでしょう。



夏休みに入ってすぐにみんな
が楽しみにしていた林間学校が
七月二十八日から始まりまし
た。林間学校では、五色沼トレッ
キングや磐梯山登山、コース別
のアクティビティ、レクリエー
ションをしました。磐梯山に登
山したときはいつもと違う二十
期生の顔があり、クラスの仲間
たちと見た頂上の景色は絶景で
した。レクリエーションの時間
ではクラス対抗のクイズをしま
した。先生たちも交え、みんな
から「楽しかった」という言葉
を聞いたときや笑顔を見たと
き、実行委員になれてよかった
と心の底から思いました。なに
はともあれ、「林間学校の日に
戻りたい」と思えるような、一
生に一度の思い出をこの三十期
生のみんなと作れてよかったです。



七月二十八日～三十日 福島方面



英語プレゼンテーションフォーラム

中三C 加倉井 新

まずは、とてもとても楽し
かったです！僕たちは、水戸
市大会、中央地区大会を経て、
県大会に出場し、「県知事賞」
(県トップ)になりました。
僕は、チームリーダーを務め
ましたが、メンバーがみんな
一生懸命で優しい人たちで、
たくさん支えてもらいまし
た。いいチームワークがあっ
たからこそ県知事賞だった
と思います。また、最後まで
支えてくださった先生方、保
護者のみなさん、貴重な機会
と応援をありがとうございました！
自分の意見を英語で伝
えるのはあまり得意ではあり
ませんが、今回のこと
がきっかけで、もっと英語が好き
になりました。



夏季Go-Labo講座

教員 安達 紘人

教員 中山 佳紀

Jリーグ屈指の名門、鹿島
アントラーズ。アントラーズ
がホームスタジアムとしてい
るのが、茨城県鹿嶋市にある
メルカリスタジアムです。
夏季Go-Labo講座の一環と
して、高校一・二年生を対象
に、メルカリスタジアムパッ
クステージツアーに参加しま
した。

スタッフの案内のもと、鹿
島アントラーズの歴史やフィ
ロソフィーを学び、普段入る
ことができないロッカールーム
や記者会見室を見学しまし
た。ピッチを歩いたりしまし
た。スタッフの方に、仕事の
やりがいなどを聞くことがで
きたのも貴重な経験です。
今回のプログラム実施にあ
たり、多くの方々にご協力を
賜りました。この場を借りて、
心から感謝申し上げます。



「Go-Labo」の活動として、
国会議事堂と読売新聞社を見
学しました。読売新聞社では、
新聞記者の仕事や記事の決め
方についてご講義いただき、
報道の現場の工夫や責任の重
さを学びました。続く社内見
学では、取材から紙面が完成
するまでの過程を具体的に知
ることができました。国会議
事堂では、実際に内部を見学
し、国の政治が行われる場の
緊張感を肌で感じました。非
常に暑い中での実施でした
が、多くの発見と学びに満ち
た貴重な体験となりました。

